

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第111号(通巻第171号)
2013年10月31日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山3-9 東永山複
合施設 301 tel&fax042-376-4572(事務局員は常駐
しておりません) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL <http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp>

グリーンボランティアを知りみどりを護る



フィールドの豊ヶ丘小でまず説明

環境学習セミナーの第3回は「多摩市の里山管理:グリーンボランティア」だった。10月19日(土)の午前9時30分に市立グリーンライブセンター集合。

前半は多摩グリーンボランティア森木会の川添修会長を講師にした、同センターでの座学。後半は近くの豊ヶ丘小学校の学校林に移動しての実習という予定だ。参加した受講者は18人。

川添講師の話の内容。

多摩市の面積は2108ha、うち市の管理する公園・緑地は205カ所で199ha。人口は約14万5000人だから、人口一人あたりの面積は13.6㎡になる。これをニュータウン地域と旧市街地地域で比較すると、前者は18㎡なのに対し、後者は8㎡と違いが鮮明だ。

多摩グリーンボランティアは、市内の緑地がしだいに荒れていっているのに、行政だけの力(予算を含む)では対処できないと2001年に結成された民間のボランティア組織で、行政



グリーンライブセンターにて

との協働で運営されている。また1年間にわたる講座を行い、基本的な知識と技術を身につけた人材が育てられている。

多摩ニュータウンの開発は昔からの山の土を削り、その土を低地に敷いて高低差が少なくなるような手法で行われたが、その高い部分と低い部分のあいだの斜面にいくつかの里山が残された。グリーンボランティアはこうした部分をおもに活動拠点とし「みどりを護る」活動を行っている。

みなさんも、こうしたみどりを保全する活動に関わってほしい——というもの。

フィールドワークは豊ヶ丘小学校。学校の西側には7100㎡という都内で最大の学校林があり、ここが長いあいだ適正な手入れがされてこなかったため、いまや危機に瀕しつつある雑木林となってしまった。



作業実習では赤羽講師が担当

これにショックを受けた学校では、「学校林活用・再生プロジェクト」委員会を立ち上げ、樹木医や外部の専門家など多様なメンバーを入れて再生に取りかかり始めた。



適間に間隔をあけてササ刈り

こういった学校林で、受講者らは林床に生えているアズマネザサ刈りを行った。各人がヘルメットをかぶり、手にはカマを持って、安全性の面から隣の人と2mの距離をあけ、斜面のササを刈る。刈って土が露出してきたところにはキンランやギンランなどの希少植物が顔を出すようになるという。これも来春以降の楽しみだ。

ササ刈りは30分弱で終わり、最後に使ったカマを砥石で研ぐ研ぎ方を教わって、この日の講座は終了した。

秋の雑木林の植物をウォッチ

旧聖蹟記念館周辺の雑木林で行われている月に一度の「自然観察会」。10月は1日に開かれた。テーマは「秋の雑木林」。今回の参加者は、朝方の雨が影響したか、38人と比較的少なかった。(多いときは80人!)案内するのは多



新しい公園で先生の説明

摩植物友の会の先生・種本尚子さん。男性会員が助手につき、草花や木の名前を紙に書いて対象物に貼っていく。

記念館の前からもみじ平へ歩きだすと、先生からムクノキ、イチョウ、ウツボグサ、キツネノローソクなど、どんどん植物が紹介される。その先に行き、生えていたムクロジは実が固く、羽根つきの玉になるほど。

駐車場の手前ではキンミズヒキ、ヒメキンミズヒキなどが見られ、駐車場にはジュウガツザクラが植えられていたが、まだ花は咲いていなかった。よく見かけるカラスウリはお盆のころまで蔓が上がり、その後は下がっていき、地に着いたらもぐって根が出るそうだ。

記念館の北側のだらだら坂を下っていくと、ツクサやオオニシキソウなどのあとで、ママコノシリヌグイという初めて聞く名の草があった。これはとげのついた植物で「ママ子をいじめるのに、この草のとげで尻をぬぐう」というのが名前の由来だそうだ。けっこう怖い一面もある植物界だ。

環境行事实行委員会の行う「秋の環境ウォッチング」では、田んぼの帰りに森林総研から大谷戸公園に帰る際に右に曲がる地点で、最近ではキツリフネが繁殖していたが、その上部の地点では本来の赤いツリフネソウがしっかり群落をつくって咲いているのを見てホッとす。

旧農業者大学のグラウンド跡地は、現在は東京都によってきれいな公園に姿を変えて小さな池もあるが、ここにはアメリカズメノヒエ、アメリカタカサブロウなど外来種が繁茂。ミゾソバ、クサギなど水のある環境に生きる植物もあって多様だ。観察できたのは全51種だった。



怖い名のママコノシリヌグイ

日本唯一のバイオガス発電企業見学記

数年前に一度訪れたことがあるが、今回ふたたび食品残渣などのバイオマス(生物資源)で発電するバイオエナジー社(東京都大田区城南島3丁目=都のスーパー エコタウン内)を見学する機会に恵まれたので、さっそくレポートしよう。



外観はなんの変哲もない工場

ここでは1日24時間、機械の定期整備を行う日を除く365日、生ごみを受け入れ、それをもとにした発電を行っている。1日の最大受け入れ量は110トン。ごみはおもにホテルやデパート、飲食店などから出る食物残渣(商業廃棄物)で、一般家庭などからの回収は行っていない。

というのは、平成15年にこの会社を立ち上げたのが産業廃棄物を扱う民間主要4社によるものだったからだ。つまり、ごみ処理を1kgいくらという有料で引き受ける「お客さん」のいる企業がつくったというわけ。

ごみを受け入れる「ホッパー」と呼ばれる受け入れ口は3基あり、投入されたごみはそれぞれ2次まで破砕機で破砕し、そこで出たビニールやプラスチックなどの不純物を選別して不適物ホッパーに分けて管理する。



ホッパー内の生ごみ

発酵に適する原料になったごみは2棟のメタン発酵槽に入れられ、およそ30日間メタン発酵を行う。発酵槽でメタン菌が生ごみを分解することでバイオガスが発生する。このガスをガスエンジン発電機に送り、1基最高560kW/hを発電する船舶用の三菱重工製12気筒エンジン2基がフル稼働して発電を行っている。

われわれの見学時も壁に設置されたモニターが、現在の発電量として980~1050kW/hあたりを表示していた。

一方、最近ではメタンガスが想定以上に生産できるようになったため、熱量を上げたり、匂いをつけたりして、東京ガスの規格に合わせたガスに加工し、3年前より同社に都市ガスとして「売ガス」も行っている。

これらの事業により1日2万4000kW/hの電力と1日2400立方メートルの都市ガスを生産できるようになった。とくに、昨年7月から再生可能エネルギーによる電力の固定価格全量買い取り制度が始まり、このバイオも含まれるため、現在は1kW/hあたり39円で売れるようになって収益は大改善。(それまで東電の買い値は同7.7円)

このような事業を行っているのは国内では1社だけのこと

で、平成20年には天皇陛下も視察に訪れている。同社では、電力の買い取り制度を追い風に今後も都内、神奈川、埼玉など首都圏に3工場を建てる構想をあたためている。

メタン発酵槽 それはそれでけっこうなことなのだが、この工場だけで1000kW/h発電できるのに、広い敷地と高い建設費を払って、しかも太陽が出ているときしか発電できないメガソーラーというもの、壮大な無駄遣いをしているように思えてならなかった。(イ)



ホッパー内の生ごみ

国と東電、放射能と闘うことを決意した

“ベコ屋”(3)

国策だった原子力発電。自民党が全国に50数基もつくってしまった。原発事故のあと、福島県はあつという間に「脱原発」に切り替わった。それまではずっと「推進、推進！」でやってきた。それが現在、爆発によって果てしない「除染」という無駄遣いが続行されている。



白い斑点の出た黒毛牛

汚染された土壌を袋に詰めて5段積みしている。どこに持っていかも決まっていな。これでは除染ではない。ごまかしだ。それが高く積み上げられた光景を見て、避難民がそこに帰ろうなんて思うか？

でも放射能と妥協しても浪江に帰ろうよ。仮設住宅で人生終わってもいいの、と大勢の人にいいたい。うちの牧場は時間当たり2~3マイクロシーベルト。そこは別世界のような牧場になっている。人が見にくる。報道陣や白い斑点の出た牛がいるから大学の研究者もくる。

全国のボランティアさんが、牛にエサをやるお手伝いに来てくれる。牧場から見える景色は、第一原発の排気塔、目を移せば東京に向かう送電線が3本。

うちの牧場の200頭の牛が死んでしまった。エサもなかったし、エサを運ぶことも妨害された。いま、放射能に汚染された売れない牛を飼っている。なにをバカなことをやっているんだ、という人もいる。逃げざるを得なかった元牧場関係者は、牛の姿を見ることに耐えがたい。イライラが募る。「おまえの牛は殺処分しろ」と牛屋同士でいい合いをしている。

なかには「東電の賠償金をもらいながら殺処分しないのは詐欺だ」なんていう人もいる。「オレのじゃねーよ」と返す。だれの牛かわからない、所有権があるのかなのかかわからない牛たちだ。360頭の牛にエサを与えながら、きょうだって地域を捨てずにやっている。

「殺処分に逆らって何の意味があるんだ」とずいぶんいわれた。だけど心の問題なんだよ。オレは心を折ってられないんだ。

絶望の浪江町。だけど人は絶望のままでいいの。原発事故はオレたちのせいじゃない。国のせいだ。なのにオレたちが死滅させられようとしている。棄民の扱いだ。国は殺処分という牛たちに対する「棄畜政策」を行った。棄畜政策は「棄民政策」につながると思っている。

オヤジやオフクロは戦時中、満州開拓団で満州に入った。これも国策だ。中国への侵略戦争。開拓団を動員しながら、その戦争に敗北したとき、権力者たちはイの一番に逃げた。開拓団は取り残された。

とにかく生きるために、けだもののような思いをしながら逃げた。あの寒さのなかで、仲間がどんどん死んでいった。生きて帰ったのが不思議なくらいだった。

今回の避難者のなかにも、80歳、90歳になった満州引揚者がいたと思う。生き残るために、また当時と似た思いを味わったことだろう。命の問題、心の問題、その挫折感のなかで、すごくそういったものを引きずっているのではないか。(吉沢正巳:希望の牧場ふくしま代表)